

身延山久遠寺門前町に就きて

五四

身延山久遠寺門前町に就きて

法學博士 平 沼 淑 郎

平沼先生はかつて早稻田商學誌上に身延山門前町の研究を發表せられましたが、未だ意に滿ずるなして、今春助手入交好修氏と共に來山、親しく古文獻に就いて調査せられました。すでに各地諸大寺に就ての研究成果は學界に功獻するところ多く、今我が山のそれに就ては、特に先生に御願して、その一部分を得て本誌上に掲載する次第、先生の御好意に對して深く感謝する次第であります。

(今村記)

稿を起すにあたり、身延山の經來りし歴史事實に隨つて、大体左の如く四期に區分して、夫夫の時代に隨つて記述したいと思ふ。

- 一、守成時代 (弘安六年—寛正二年) 百七十六年間
- 二、祖山興隆時代(寛正二年—延寶七年) 二百十九年間
- 三、祖山全盛時代(延寶七年—明治維新前)
(元治元年) 百七十九年間
- 四、革新時代 (慶應元年—大正十二年) 六十五年間

× × × × × × × ×

(一) 守成時代 弘安六年正月廿三日一百日の喪を畢るや、昭朗等の六老僧以下が一月交代を以つて輪次に塔を守ることとなつた。この時期は正應元年十月その廢止さるゝまで約七年間に互り、これを『守塔輪次時代』と稱す。かく月番の制が定まるや、六老僧以下は各々山内に草庵を構へた。

なほその他に文永十一年九月八日相又村榎畑史姥さつぐわ即ち後の日佛が願主となつて『下之房』を建立し、また日傳は『志摩坊』を開基し、四條賴基は『端場房』を開基し、山内坊中の權輿を成した。

正應元年日向は身延山第二世として、始めて猊座を占め、以後四十五年間第四世日善までを直弟相續時代となす。守成時代祖山の外護に力を致しゝは舊の如く波木井氏であつて、初代實長、二代長義共に祖山外護の遺誠置文を残してゐる。

(二) 祖山興隆時代

- (1) 中興期(寛正二年—天文十二年) (2) 進展前期(天文十三年—文祿元年)
- (3) 進展後期 (文祿元年—應長六年) (4) 隆盛期 (應長六年—延寶七年)

本時代は歴史の上に於いては應仁の亂を距る七年以前より徳川氏第四家綱將軍の晩年に至る二百十九年間である。日朝上人は文明七年西谷の地狹隘なりしたため、鷹取山麓に堂塔伽藍を移し、以て萬

世不易の基を確立した。他方學術を振興し、制規を肅正した。年中行事、月行事輪次が組織化されたのはこの時代であつた。今試みに月行事輪次を文書中より抄記せば次の如くなる。

一番	杉ノ坊・福泉坊	二番	南延坊・積善坊	三番	眞淨坊・端場坊
四番	武井坊・南ノ坊	五番	慶林坊・圓臺坊	六番	大林坊・大乘坊
七番	覺林坊・大善坊	八番	山本坊・窪之坊	九番	志摩坊・岸之坊
十番	下之坊・隅之坊	十一番	林藏坊・華之坊	十二番	東之坊・山之坊
十三番	竹ノ坊・松井坊	十四番	定林坊・樋澤坊	十五番	法雲坊・佐倉坊
十六番	南向坊・北之坊	十七番	蓮心坊・戒善坊	十八番	麓坊・清水坊
十九番	西之坊・本行坊				

これによつて、當時の房數も知り得られる。

時代は進展して群雄割據の戰國に入るに及んで、大檀越波木井氏は漸く衰へたが、外護は吝まなかつたものが他に出で來つた。

甲斐の武田氏は信玄の父信虎の時代、日傳がその惡疾を平癒せしめた故を以て、甲府信立寺を建て、これに敬侍したことが傳へられてゐる。この時に身延山は始めて官寺と成つたといはれてゐる。

信玄に至つて永祿元年禁制狀を下してゐる。左の如し。

禁 制

- 一、殺生禁斷之事付於ニ寺内ニ射レ弓放ニ鐵炮ニ事
- 一、任ニ代々判ニ諸役免許之事
- 一、押買狼藉之事
- 一、寺家中町中諸公事任寺法之上者爲衆徒中向後不レ可有ニ非分之沙汰ニ之事
- 一、大坊並僧坊下人之外或號ニ他之被官ニ恣借ニ俗家之權威ニ族町中不レ可ニ許容ニ之事
- 一、當國中身延山末寺之事始ニ先々可レ爲ニ聖人御計ニ之事
- 一、身延山寺中並町中之事如ニ先々ニ永代可レ爲ニ不入ニ事

右之條々任先判仍如件

永祿元年十二月十五日

これに據るに身延山は諸役を免除せられ町中は本山の支配に屬せしことが知らるゝ。信玄は日蓮宗が淨土宗に對する法論に就いて『鹽尻』第六に出てゐる如く、『淨土宗與日蓮黨於分國不可有法論若有取持人者師檀共可處罪科事』と布達してこれを嚴禁してゐる。巷説に『信玄身延攻め』といふことがあるが、かく外護に力を盡し、信玄がこの舉を敢てしようとは思ひも寄らぬ。

武田の將穴山伊豆守信君は信玄の姉を母としてゐた人で、入道して梅雪齋不白と號した。久遠寺に左の文書を與へた。

貴寺門前諸役等任舊規例令免除之解者以此旨寺役嚴重可被仰付之者也仍如件

天正九年辛巳五月朔日

不 白 (花押)

久 遠 寺

織田信長が山法師の横暴を憎みて叡山を焼き、高野を攻め、一向宗を征伐し、佛教に對して大なる壓迫を加へしことは史上明かな事實である。日蓮宗もまた全くこの圏外に出づるを得ざりしならんとは必ずしも無稽の想像とは謂ひ難い。然るにこゝに天正十年三月附の『信長公御朱印狀寫』と稱するものが古記録中より發見された。即ち

禁 制 甲斐國身延山久遠寺

一、軍勢甲乙人等亂入狼藉

一、剪採山林竹木事 付放火事

一、相懸箭錢兵糧事

右條々堅令停止畢 若於違犯輩者速可處嚴科者也 依下知如件

天正十歲三月 日 朱印

といふのである。天正十年六月二日の本能寺の變を距る三ヶ月の前である。

徳川家康は天正十年より十八年に至るまで甲州を食みし關係上、同十年に身延に詣で莊田一千石を願たんとせしも家康のために武運長久を祈願せし日鏡はこれを拜辭したと將來を約し、天正十六年十一月十一日に身延山に朱印狀を下附してゐる。その文に曰はく

甲州身延山之事

一、久遠寺中同門前殺生禁斷並竹木免許之事

一、寺中並門前諸役等任三舊規例一免除之法度以下如三前々一從二大坊一可レ被ニ申付一之事

一、大坊並僧坊之被官之外令ニ徘徊寺家町中一不レ可レ借ニ俗家之權威一事

一、分國中久遠寺末寺等如三前々一可レ爲ニ住持上人斗一若寺僧末寺對ニ本寺一相企ニ不儀之覺悟一者則從ニ大坊一可レ有ニ追放一其上國中不レ可ニ許容一之事

一、信立寺寺内諸役免許之事

右之條々永領掌不レ可ニ相違一以ニ此旨一彌佛法興隆無ニ怠慢一修行肝要也 仍如件

天正十六年戌子十一月十一日

家 康 公 御 判

身延山久遠寺門前町に就きて

かく家康と身延山との密接不離の關係を生じたのは、日鏡上人が家康小身微祿の砌、開運曼荼羅を圖して贈つた時より以來のことである。その後二代秀忠の時の朱印狀は全文殆んど家康のそれと同じであるがたゞ最後に、

一、會式關免許之事、當國中身延山諸末寺中寺役免許之事

といふ一項がある。會式關云々のことは萬澤宿の顯本寺、歟澤宿の蓮華寺が諸役免許の上、毎年十一月十一日より三日間會式の節、兩所の關所を預り、會式參詣の老若男女を手形なくして故障なく通行せしめた。その關札に

關御免許の添狀

一、今月十日より十三日迄身延參詣之男女路物木布は五端六端、米は五升六升、糸は十つれ十五つれを限りに役所に改有間

敷者也

丑十月朔日

丑の十月朔日とあるのは、恐らく天正十七年己丑十月朔日であらう。當時關所の通行は規定最も嚴重で容易ならぬことであつて、手形の呈示は絶対に必要であつたに拘らず、たとひ會式中の三日間とは言へ、かゝる特典を與へしことは注目すべき一事であらう。

豊臣秀吉は天下を統一するや、信長の佛教界彈壓の後をうけて、寧ろ反動的に對寺社政策に大いな

る變化を齎らした。天正十八年の朱印狀に

條々 甲州身延山久遠寺

一、山中殺生禁斷 竹木東西門前諸役等如三前々一令ニ免許一事

付僧坊沙彌之外門前不可徘徊事

一、拾貫文鹽澤拾貫文八日市場武田梅雪齋山中に圍入之地不可有相違事

一、當寺參詣之輩同寺中國役等令免許事

右相守條々旨可勤行者也

天正十八年八月廿三日御朱印

とある。豊臣氏の外護時代は普通文祿八年日賢入山より慶長六年に亘る約十年間とされてゐる。文祿二年には秀吉の姉瑞龍院妙惠日秀尼が朝鮮役陣没の秀勝追善のために、本堂、大方丈及唐門を建立した。

慶安二年及寛文元年には寺領と買木問題が發生してゐる。當時身延の堂塔伽藍破損修覆並に寺中門前家作の節は、大城山・相俣山・赤澤山三ヶ所より毎年用材、篠、板等を買取來つたやうである。然るに買取不許可となつた爲め、先規のごとく仰付られたき旨、六老中に願出で、代官松木三太夫への達書が出た。即ち次のものである。

身延山久遠寺門前町に就きて

六二

表書之通久遠寺訴訟ニ候其方御代官所大城山相保山赤澤山ニテ前代ヨリ板材木買取身延山建立破捐修覆並寺中門前家作等仕
來由ニ候間右村々被致穿鑿於無紛者如先規可被申付不及申候得共身延山之外へ一本モ出候ハヌ様ニ可被入念候 以上

慶安三年三月廿七日

六老中連署

松木三太夫殿

寛文二年に樂人衆に對して諸役免除の制定があり、正徳年間には『宿房』制が既に確立し、各地檀那寺別に參詣者を宿泊せしめたことが推定さるゝ。次の文書は本山の支配權強くして、諸種の容喙を容るゝの餘地なかりしことを證明するものであらう。

掟

一 毎年十月會式中當國參詣之仕止宿免許之事

附會式中たりとも他國之參詣止宿者停止當國之參詣止宿者會式中ニ可限尤當國ノ親類之者平日參詣無様止宿之道者其宿坊え急度可相届事

右之趣今般御免被仰付候余條者如古法可相守萬一心得違之族於有之者役人共迄可爲越度者也

天保六乙未年十月

評定中町名主年寄中

宿房定

林藏房 立本寺(京都) 大石寺(富士) 經王寺(堺) 海淨寺(信州) 本妙寺(中山)

山本房 弘法寺(眞間) 妙顯寺(京都) 了仙寺(伊豆) 感應寺(駿州) 海源寺(海老名) 實相寺(備後)
 隅之房 七ヶ國六條門徒 妙了寺(甲州)
 端場房 丹後但馬當門徒 本隆寺(京都) 妙純寺門中(相州) 本國寺(下山)
 窪之房 蓮永寺 本覺寺 海長寺(駿州) 妙滿寺(京都) 本妙寺門中(下野) 長法寺(堺)
 竹之房 本門寺(池上) 本土寺 妙本寺(比企) 正法寺(小西) 妙興寺(野州)
 松井房 誕生寺 妙覺寺門徒 諸門徒(參州) 大禪寺(京都) 本成寺(安房)
 清水房 妙顯寺門徒(京都) 妙成寺(紀州) 雲雷寺 海寶寺 成正寺(大阪) 法要寺(周防)
 南之房 玉澤門徒 水戸諸門徒 孝勝寺門中(仙臺) 感應寺(伯州)
 下之房 妙法寺(越後) 養珠寺 法音寺(紀州) 遠妙寺(甲州)
 北之房 本成門徒(越後) 岡宮門徒(駿州)
 樋澤房 妙光寺門徒(上總) 感應寺門中(東京) 鷺山寺門徒 廣昌寺(讃岐)
 大林房 當門徒古末寺(江戸) 法輪寺(飯高) 妙蓮寺(富士) 遠照寺 長源寺(信州) 東金門徒(上總)
 武井房 諸國京妙覺寺門徒 本陽寺(信州)
 杉之房 立正寺(休息) 國前寺(藝州) 妙顯寺門中(佐野) 本立寺 大法寺(八王子) 寶清寺(小川)

志摩房

諸門徒(遠州) 妙法寺(小室) 要法寺(土佐) 妙蓮寺門徒(京都) 長遠寺(信州) 常諦寺(駿州)

岸之房

本門寺(富士) 法華寺(富士) 要法寺(京都) 鏡忍寺門中 本遠寺(大野)

定林房

本能寺(京都) 長遠寺(甲州) 弘妙寺(信州)

覺林房

本門寺門徒(京都) 妙傳寺 本覺寺(相・豆) 當門徒(伊勢) 當門徒(尾州) 玉傳寺 淨永寺(相州) 諸門徒(近江)

法雲房

諸門流(江州) 諸門流(佐渡) 六條門徒 根本寺 妙宣寺 實相寺 妙照寺 聽法寺(甲州)

右二十房の外

西之房

碑文谷法華寺門中

麓房

信立寺(甲州)

圓臺房

實相寺門中(駿州) 蓮乘寺(駿州) 本立寺(相州)

大乘房

淨光寺(會津)

南延房

滿願寺(京都) 正願寺(郡山)

又『三誠五禁』といふものがあるが、三誠は本山の指導原理を示すものと謂ふべく、五禁は當時の風儀の如何に頽廢せしかを如實に示す證左に供すべきものである。三誠は

- 一、者學成就可レ達ニ法要ニ事 二、者不レ能ニ其器ニ者寺院可ニ建立ニ事 三、者不レ能ニ其器ニ者可レ致ニ給仕助功ニ事

また五禁は

- 一、爲己說法事
- 二、爲己大命取人事
- 三、亂行放逸事
- 四、女犯肉食事
- 五、遊藝之事

(三) 祖山全盛時代

延寶七年日脱上人の入山より、元祿十一年その遷化に至るまで約二十年間、坊舎堂塔の建立極めて多く、空前絶後の壯觀を呈した。これ身延山が漸く全盛期に入つたことを示すものである。貞享四年祈禱堂並に三十六坊建立はその代表的なものと謂ふべきであらう。正徳二年には房舎百三十三を數へ、寛保・延享の頃に至つて、本山の整備結構また壯麗を極むるに至つた。徳川時代の後半に入るに及んで、門前町屋の發達、商業金融の組織また具備し來つた。

顧るに身延靈山の進展發達をいたく阻害したものは火災地震及水害である。就中數次に亘る祝融氏の暴威は研究の資料を埋滅し、門前町發達の跡を尋ねんとする小生の企畫を困難ならしむる最大原因となつゐる。左に火災を編年的に記述して見よう。

(一) 延享四丁卯年七月七日 下之坊より發火山内十一坊を焼失す。

(二) 安永五丙申年十月十二日 夜七面山堂宇を全焼す。

(三) 文政四辛巳年八月九日 夜九ツ時出火して御廟・八角堂・拜殿を焼失す。

(四)文政七甲申年八月廿七日 夜發火して本堂・祖師堂・位牌堂・上行堂・主堂・萬燈室・舞台・樂局・推轡堂・鼓樓・圓師堂・二重寶塔番所計十三棟全く灰燼に歸せしめ、僅かに祖師供所及び祈禱堂を残してゐる。

(五)文政十二己丑年九月六日 夜五重塔より發火して會合所・大方丈・水鳴樓・奥書院・庫裡・對面所・藏經堂・眞骨堂・中央・拜殿・古佛堂・位牌堂・東照宮玉屋・表門・門番所・長屋・通本橋・湯吞所・廊下等伽藍堂宇二十八棟を烏有に歸し、残るは東西兩寶藏と鐘堂のみである。同時に又門前町方にも延焼しその大半亦焼土と化し去つた。この文政年間再度の回祿のために、身延山の受けた打撃は蓋し前代にその比なきところであらう。

(六)慶應元乙丑年十二月十四日 晝四ツ時中谷仙臺坊より出火し、三門・太子堂・天神堂・常唱堂・常經堂・松屋堂・妙見堂・妙翁堂・廿三夜堂・支院十七ヶ坊等を焼失、火焰は上中町及び下町の牛をも舐め百六戸の民家を亡した。

(七)明治八年一月十日 午後六時西谷本種坊より出火、本院・鼓樓・祖師堂・位牌堂を始め七十五棟、寺中十二坊、門前町家十軒を焼失した。身延山回祿中の正しく最大なるものである。

(八)明治二十年三月三日 中町より失火は門前町屋二百餘戸を舐め盡して、猛火は仁王門・竹之坊・山本坊及松井坊に延焼し、總てを烏有に歸せしめた。

以上掲記した外文久四年甲子二月廿日正午の山火事は新宿の清正堂・妙正堂・支院三ヶ坊・町方四戸を延焼し、文政十一年戊子六月卅日の大風雨は河川を汎濫せしめて、上新町及下新町の人家を流失した。又遠く寶永四年丁亥十月四日、五日の地震には諸堂破損し死者十八名を出し、嘉永・安政の大震災もま

た損害を及ぼしたることは古記録に散見してゐる。

これらの大災害が全山に多大の損害を與へたことは明らかであつて、全山衆徒をして『歷代諸聖の苦辛造營は空しく一片の煙と化し終れり』との嘆聲を發せしめたのであつた。しかしこの慘害を救済するに何如なる方途を以てしたか。他の大寺院に於けると同じく寄附・外護及開帳の方法を以てしたのである。就中火災直後の寄附外護は時代の變遷とともに、幕府並に各藩主よりも寧ろ漸次各講中及富商の力に據るの傾向を示してゐる。これ時勢の變遷を語るものであつて、こゝにも亦封建制衰退の一微候を示す。

出開帳が當事者の絶大なる努力に依つたことは勿論であるが、幕府及領主の援助もまた與つて力あつたことは見逃すことを得ない。出開帳を例記せば左の如くである

(一) 寶曆三年四月朔日方	江戸深川淨心寺	六十日間
(二) 文政三年三月十一日方	同	同
(三) 天保元年七月十九日方	同	同
(四) 同 八年七月十九日方	同	七十日間
(五) 嘉永二年七月十九日方	同	六十日間

(六) 安政四年七月

同

同

(七) 文久三年

同

居開帳は、明治二十三年五月六日より二十六日まで山内諸堂の開扉を行ひ、什寶書畫に至るまで、普く衆庶の觀覽を許した。

慶長九年日遠上人が入山するや、直ちに『身延山掟』並に『町中掟』を制定してゐる。これを左に掲ぐ。

身延山掟

一、堂之番可嚴密事 晝夜五人不レ闕被レ詰但朝經已後晚鐘已前雖レ爲三人一不レ可レ苦 本堂御影堂外陣並椽毎日掃除至諸堂ハ五日一度掃除 當役之時不可差置綴小袈裟並堂内誦高雜談等之無沙汰停止 運送之外居ニ於堂内一之時不可以尼女經机並道具糺明不レ被レ渡ニ次番ニ一爲ニ番代ニ十八歳已前小僧禁制

右於ニ緩漫ニ者如ニ先規ニ可爲十日過 番緩漫之旨令ニ告知ニ者銅錢百足可ニ給與ニ焉

右之條若妄舉ニ無實ニ者過失可レ同ニ其本罪ニ事 凡補ニ先代法度ニ經ニ衆中評議ニ重而所レ定如レ件

追 加

一、御堂番代官禁制 但於レ有ニ顯露之切用ニ者結衆者 可レ賴ニ結衆之内一 爲レ代ニ先達客座等ニ可レ准レ之不レ爾者爲過代鳥目
二十疋

慶長第九甲辰七月二十七日

日 乾 判

日 遠 判

町 中 掟

一 從公儀被仰出御條目堅可相守事

一 ふかく信力を勵まし節々堂參すべき事

一 刃傷かたく停止せしむべき事

若し此旨そむくにおゐては永代追放たるべし

一 打擲禁制

若此旨背むくにおゐては一年追放あるべし退出の間は其組として家役あいつとむへし

一 口論かたく停止 若この旨そむくにおゐては入足三拾人過代あるへし

右三ヶ條縱令すいきやうたりといふとも宥免あるへからず

一 往覆にも内にては松火たいまつ停止並かまと能く火乃用心すへき事

一 火乃用心のためなる間屋敷一間にた人住居せしむへからざる事

一 番の者にして毎夜火并盜人の用心能くよはふへき事

一 公儀をえすして他所の者抱おくへからず

一 大坊に申上すして屋敷の賣買いたすへからざる事

身延山久遠寺門前町に就きて

一 うりさめをなすへからさる事

一 米穀等の賣買他所を聞きあはせずして私權を立つへからさる事

一 參詣の衆たとひ不如意の仁なりとも一宿も致すくからさる事

一 山中松の木ある山に於いて下拂をも致すへからさる事

一 五日に一度つゝ未明に出て家のまへ一同に掃除すへき事

一 女房とも日出のまへ入達の後は寺内へ往覆すへからさる事

一 衆非衆老若をえらはす僧衆に對して惣て慮外致すへからさる事

一 僧中のうわき實不實によらず町中において惣てとり沙汰いたすへからす若申上へき旨あらは急度大坊え申上げ糺明あるへしたゞし無實に於ては追放あるへし

一 大小事によらず惣して宿太郎の下知に隨ふへき事

一 徒黨引率いたすへからざる事若違背の者は速かに可行追放事

右條々相違致すにおいては急度罪過行ふへし其くみとして詮索をとけ時をうつさす過失の趣を可申上 若自他處相聽にをいては其のくみの家々より銀子二匁つゝ過代を出すへし若他處よりつけしらしむる者は褒美あるへし縱令この外なりとも其過をしりながらかくしなかは急度糺明に及び罪過にをこなふへし

所定如件

慶長第九甲辰霜月七日

身 延 山

とある。この『町中掟』は今回採訪の節、寶物館の一隅に陳列してあつた制札より轉寫したものであるが、この制札は久しく風雨に曝されたもので、墨痕消磨して判讀に苦しむ箇所が多々ある。思ふにこの制札はもと町内の要所に立てられたもので、門前町に關する法規の最初のものとも謂ふべきである。文面に據つて時代の流れとともに、門前が漸次繁昌を加へ、また大坊が町中に對して把握してゐた支配權も他の寺院門前町に比して餘程強力であつたことが想像し得らるゝ。棟梁その他獨占的現象の顯れ始めたのもこの頃よりであらう。それは門前町の發達と不可離の關係にあるものと謂つて可
はなからう。

延寶年間の『門前法度』に

當門前被仰出之條目

一、家屋敷物質之事

一、家屋敷賣買之事

一、内證ニ而致契約差出事

右三ヶ條於違犯者本人證人可爲追出并五人組□□爲罪過者也 但被官不叶子細者内規ニテ

身延山久遠寺門前町に就きて

身延山久遠寺門前町に就きて

七二

本院納所可請下知者也

延寶三乙卯歲四月十五日

當番 南 泉 坊

また寺院が經濟生活に關與したことを證示するものである。

門前商業のことに就いては左の文書がある。

一月六度垣市之事

上旬兩度

上宿惣町中

中旬兩度

中宿惣町中

下旬兩度

下宿惣町中

高 荷 之 事

上 廿 日

宿 太 郎

下 十 日

惣 町 中

右旨違亂之輩可爲永代追放之罪科仍而所定如件

慶安四辛卯極月三日

これに據つて、市場開催の狀況も推知し得る。

翻つて身延山の山内組織を見るに、これを詳かにすべき何等の資料もなく、唯僅かに古老の記憶を辿つて、これを述ぶるの外に術なきを如何にせん。本山には本院、支院の別があつて、支院は部屋房即ち檀林の如きものと房・坊とで、部屋房から『時ノ頭』、房から年行事・月行事が出で、山内行政

を司つたやうである。また座席には一老から五老に至るまでがあつた。前掲『身延山掟』に見ゆる『結衆^{けっし}』は山徒方を代表するもので、後年總結衆及半結衆に分れて、本願といふものと共に町方にその名残を留めてゐると聞いた。

身延山に特有なる司法を掌りしものに『加用人』と呼ぶものがある。隠目付のごとき役割をなした。後年には雛僧の中からこれを選出したことが古記録にも見えてゐる。これに就いて延寶元年十二月附『加用人規則五ヶ條』がある曰はく

條々

一、從天下仰出候通徒黨引率申間舖事

附企不儀一味同心仕間敷事

一、如先規 衆徒中無被不可爲之事

附違背師命仕間敷事

一、任舊規會合之節施主方或無據俗人之相伴者給仕可仕事

一、於本院寺中會合之時萬端不足之事 者以內證所中不可異儀取結事

一、如先規加用人之作法堅相守嚴仕間舖事

身延山久遠寺門前町に就きて

身延山久遠寺門前町に就きて

右之五箇條永々堅可相守者也

延寶元年癸丑極月十六日

老僧中 當衆中

四十歳以上の者入加用の際は料物を納めしめて、制限を加へたやうである。即ち

入加用の料物

一、甲一朱 方 丈

一、百文 當 番

一、百文 院 代

一、百文 宿 坊

一、甲貳朱 加用仲間

右衆評申渡之上は自今方支守中ともに不可有相違者也

寛保三癸亥年十一月四日

評 定

とある。明和二年の『加用人新入申渡事』は詳細儀禮にまで及んでゐる。曰はく

新入申渡事

一、出仕往來之節大衆中へ慮外不可致之事

一、頭布色袈裟不可用事

一、何事によらず一結相談不可洩事

一、於ニ山門^ニ門^ニ前^ニ之者共ニ慮外不^レ可^レ缺若放埒之者有^レ之ハ時頭可^ニ申上^ニ事

一、加用分門前^ニ而放埒不^レ可^レ致事

一、裏附駒下駄不可用事

一、出仕往來節[□]買より上不可事

一、給仕之節上帶無用之事

一、給仕之節下緣依下る不可事

一、出仕會合其外寄合之時分行儀正敷可致事

一、波木之家ハ可爲格別事

一、不知事ハ時之案内可聞事

右之條々急度可相守者也

明和二酉年霜月廿四日

時
之
頭^印

享保年間の『町中定』には

定

一、町中[○]禮儀等之事如舊規程りに無之様可有吟味雖有先規此度彌申渡者也

身延山久遠寺門前町に就きて

一、波木井家者爲格別事

享保七年七月 日

老僧當番

加用人

この文面中『波木井家格別たる事』とあるは、これより先、天祿十二年當番房より波木井・熊谷兩家に對して年寄役免除の申渡ありしがためである。

寶曆四年六月八日には『永代千部講』が組織されてゐる。尤もこれより以前享保十八年二月永代不易千部會が成立して居るが、このたび千部金に改正を加へ、法規を定めたのであつて、明治三年に至るまで相續いて祖山營繕費の一半を荷擔してゐる。千部金の事は

一、元金 甲、百拾八兩 内參拾五兩二分正金 八十二兩三分平形金

一、元金 文、百五拾兩 内五拾兩ハ御濱御殿蓮成院寄附

外 文、百 兩

報恩講料 一、本金甲 四拾兩 一、月文 百貳拾兩

とあつて、講金貸付の方法は、金子拾兩借用者には時價二十兩の土地を擔保に供せしめ、返済期限は三年以内とし、借金高は百拾兩未滿と定めてある。若し返済を怠つた時は千部役僧協議の上にて出訴する。千部金は方丈より火急の入用有るも用立てず、同時本願人手前借もせず、金子利子多く、千部講入

用の上、剩餘金あるときは本願人相談の上修覆等の御入用に差上ることゝなつてゐる。

徳川末期に至ると、古記録の中に加賀金澤の富田屋長右衛門・田井屋清助等より金子の融通を受けしことが散見してゐる。こゝにも當時の高利資本の進出を見ることが出来るのである。

山内坊中は文永十一年の『下之房』竝に『志摩房』『端場房』に淵源し、弘安六年六老僧が山内に結んだ六房を加へ、寶徳・長祿年間『岸之房』『花之房』『慶林房』の建立が古記録に見ゆる。文明年間には三十八房を數へ、下つて貞享四年には三十六坊の一時建立があり、正徳二年には房の總數百三十三を數へてゐる。蓋し空前絶後の繁榮であらう。されど徳川末期萬延時代には九十三ヶ坊であつて、四十坊を減少し、維新時代の癡佛毀釋の波は坊舎の廢合を促し、明治九年には僅かに三十二坊を残してゐる。

町方の戸數竝に人口に就いては貞享三年七月調べの古文書を最古とする。即ち

町家數

一上町	東拾五軒	西拾五軒	一狐町	東十二軒	西二十二軒
一中町	東廿三軒	西二十軒	一上鹽澤	十三軒	下鹽澤三十軒
一下町	東二十一軒	西二十四軒	一裏町	五十一軒	

身延山久遠寺門前町に就きて

七八

二百四十二軒

萬延年間には次の通りである。

山内僧徒 百六拾七人（西谷檀林を除く）

下男 本院八拾二人 坊舎百三拾餘人

門前戸數 三百拾貳戸

内 譯

身延山町 貳百五拾八戸

新宿 貳拾壹戸

鹽澤 參拾參戸

人 口 男 五百貳拾七人 女 六百九拾人

總計 千貳百拾七人

即ち戸數七十を増加してゐる。『祖山由緒書』にある明治三年八月改人別帳には

本 山（方丈・支院共）

寺 數 百貳拾軒

人 口 貳百貳名

町 方

戸 數 貳百六拾貳戸

人 口

九百拾參人

高 八拾貳石六斗六升貳才

酒造 三軒

馬 拾六匹

とあるは。これは身延町の方に就いてのものと思惟さるゝ。戸數に於いては殆んど變化を見ないが。人口は倍増してゐる。

顧るに明治維新は佛教徒としては正に受難の秋であつた。神佛混淆の禁止、廢佛毀釋の運動は遼原の火の如く蔓延し、身延も亦明治四年には寺領悉く官沒せらるゝ悲運に遭遇した。これより以前慶應四年八月朱印境内及年貢地にして甲府總轄に提出した文書があるこれを左に摘録する。

一、朱印境内 右境内之内山林追々切開山畑出來仕候 只今有石高貳拾八石八斗五升九合貳勺

一、御年貢地

高百貳拾六石九斗三升三合七勺

右九ヶ村之内ニ所持仕候石高ニ候

一、高四十一石一斗六升八合	黒澤村
一、高三石七斗三升七合三勺	大鳥居村
一、高二石六斗九合四勺	市川大門村
一、高三石六斗五升	戸田村
一、高六石五斗一升五合	天神中條村
一、高十五石四斗四升七合	長澤村
一、高五斗五升五合	八之尻村
一、高一石四升	東南湖村

身延山久遠寺門前町に就きて

一、高五十二石一斗八升一合

長澤村

これが官沒せられたのである。

終りに臨んで今春探訪の砌、多大の便宜を與へられし久遠寺當局者、竝に終始懇切至らざるなき援助を與へられた今村是龍師に對して衷心より感謝の意を表す。